

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.30  
血栓を溶かし  
脳に酸素を！

小鳥のさえずりが聞こえてくる。公園で遊ぶ子供たちの声が聞こえる。ここは救急病院にある脳卒中センター。

「お父さん、いつになったら目を覚ますんだらう。」娘の佳奈の声が微かに聞こえてくる。

「ねえ、お母さん、覚えている。私が小学生の頃、家族でキャンプに行ったでしょう。あの時、魚を捕まえるんだって、川に入ったまでは良かったけど滑って転んで尻餅ついて一人ずぶ濡れになって、そんでもって一人てれちゃって。ドジだけど一生懸命やっているお父さんを佳奈は好きだったな。家族のために一生懸命働いていたお父さんがどうしてこんな目にあわなくちゃいけないの。」

「お父さんは日頃の行いが良いからきっと神様が助けてくださるわ。現に崎田先生も悪くはないとおっしゃてるんだから。」

病室には木漏れ日がさし、ゆっく

りと時間が流れていく。

私、山部聡、52歳。脳梗塞を発症したものの超急性期であったため血栓溶解療法を受けひたすら回復を待っている。俺の脳細胞よ、見事復活してくれ。愛する家族のため。急性脳梗塞は急に血流が途絶える。解りやすく言えば不意にバットで思い切り殴られたようなものだ。血栓溶解療法は血管の中でバリケードを作っている血の塊を強制退去させる治療だ。脳は酸素の到来をひたすら待っている。酸素の供給がない中、脳細胞が一つ、また一つ、はらはら、はらはらと消えてゆく。予定量の薬は投与された。一つでも多くの脳細胞よ踏みとどまってくれ。私の魂もひたすら祈り続けている。そして、指が微かに動く手応えを感じた。

「お母さん、お父さんの指が今動かなかった。お父さん、分かる？」

「ほら、眉も動いた。」

身体が思うように動かない。遠くで佳奈の声が微かに聞こえる。手を指し伸ばそうとしているが、腕が重い。声を出したいが、うまく出ない。

「口も動いたわ。」

「あなた、分かる。」

友子の声に頷くのがやっとだった。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一